

蕾

田中晴子

20代の頃は花束をもらっても全く喜べなかった。

花そのものを見て綺麗だと感じるより先に、持ち帰って花瓶に生けかえたり、濁った水を新鮮な水に変えたり、枯れた花を捨てたり、そんなすべての行為がめんどろだと考えてしまったから。

そんな私が、ある日なぜだか花屋に立ち寄った。

淡いピンクや薄紫のスイトピー、黄色や白のフリージア、やわらかいオレンジのカーネーション、黄緑のアンスリウム：

まさに心が躍るといふ感じがして、いつの間にかフラワーアレンジメントの体験教室に申し込んでいた。

できた作品は散々だったが、何とも言えない愛おしい気持ちで持ち帰ったことを今でも憶えている。

そして、帰宅する途中で、庭先の植木やガーデニング、また街路樹など、たくさんの花々があることに初めて気がついた。

世界は全く変わっていないのに、私の目に映し出される景色が変わっていたのだった。

私は薬剤師という職業柄、病気や健康について考えることが多い。

病気から回復するとは、私が花に対して体験したような変容を自らに起こすことではないだろうか。

そう考えると病気になることは決して悪いことではないのかもしれない。そもそも病気とは、これまでの生活習慣や心のあり方が間違っているよ、という体からのメッセージであるはずだから。

健康になるためには、その体からのメッセージを真摯に受け止めることが大切だと思う。

数年前の1月末に、ハクモクレンの樹に目を奪われた。

枝にふわふわとした蕾をつけている。

まだまだ冬の寒さが厳しい時期に、さりげなく春の兆しを体現するかのよう。

春に先頭を切って上品に咲き誇るその姿を私に思い起こさせてくれた。

誰の心の中にもハクモクレンの蕾のようなものがある。

それに気づけないと、自分のことを卑下したり、他人のことを批判してみたり、嫉妬したりしてしまう。

真の健康とは、その蕾を見る目を養い、花が咲いた姿を誰の中にも見出すことができる心のありようを言うのではないかとも思う。

そのような健康を私も手に入りたい。